市の概要

【2010年9月2日更新】

安曇野市は、平成17年（2005年）10月1日に、豊科町・穂高町・三郷村・堀金村・明科町の５町村が合併して誕生しました。長野県のほぼ中央部に位置し、松本から電車で約10分から30分のところにあります。市内を通る鉄道は大糸線と篠ノ井線があり、大糸線には梓川、一日市場、中萱、南豊科、豊科、柏矢町、穂高、有明、安曇追分の各駅が、また篠ノ井線には田沢、明科駅が市内にあり、通勤・通学の貴重な足となっています。 最近ウォーキングコースとして、明科地域の旧国鉄篠ノ井線・廃線敷コースが注目を集めています。

北は大町市、松川村、池田町、生坂村、筑北村、南は松本市に隣接しています。西部は雄大な北アルプス連峰がそびえ立つ中部山岳国立公園の山岳地帯であり、燕岳、大天井岳、常念岳などの海抜3,000メートル級の象徴的な山々があります。北アルプスを源とする中房川、烏川、梓川、高瀬川などが犀川に合流する東部は、「安曇野」と呼ばれる海抜500から700メートルの概ね平坦な複合扇状地（ふくごうせんじょうち）となっています。

人口・世帯数	【人口】99,190人（男48,116人/女51,074人）　【世帯数】36,774世帯 ※平成22年4月1日現在・市民課
面積	331.82平方キロメートル
標高	550メートル【安曇野市役所（本庁舎）の標高】
市内学校数	小学校10校　中学校7校　高等学校4校
市内公民館・図書館	公民館：豊科、穂高（中央）、三郷、堀金、明科 図書館：豊科（豊科交流学習センター「きぼう」内（H23.2月オープン））

	穂高（穂高交流学習センター「みらい」内（H21.9月オープン）） 三郷（三郷公民館内） 堀金（堀金公民館内） 明科（明科子どもと大人の交流学習施設「ひまわり」内）

○ 安曇野市の花

「わさび」

アブラナ科。日本原産の多年草で、春に白色四弁の小さな花を咲かせます。

【選考の理由】

日本一の生産量を誇り、特産品である「わさび」。清涼な水に育まれ身を寄せ合って咲く白い花は、安曇野市の美しい自然のもとで人々が支えあっていく象徴としてふさわしい花である、として市の花に選ばれました。

○ 安曇野市の木

「けやき」

ニレ科の落葉高木。山地に多く自生しています。

【選考の理由】

けやきは、安曇野では屋敷林などに使われ市民にも親しまれています。大地にしっかり根を張り、幹や枝が天に向かって堂々と伸びる姿から、安曇野市の発展の象徴としてふさわしい木である、として市の木に選ばれました。

○ 里山

「長峰山」

安曇野市の東に位置し、犀川、高瀬川、穂高川の三川合流を眼下に見下せる山。安曇野の田園風景と北アルプスを一望できる絶好のビューポイントとして親しまれており、頂上には展望台と1971年（昭和46年）に建てられた高さ10mの「歴史の塔」があります。

昭和45年5月に作家の川端康成、井上靖、日本画家の東山魁夷が訪れ、この地からの眺めを「残したい静けさ、美しさ。」と絶賛しました。

「光城山」

光城山は、かつて海野氏の一族である光氏が城を構えていた山です。狼煙を使い連絡しあう役目があったと思われ、山頂には火の守り神を祀る「古峯神社」があります。春には1500本のソメイヨシノが、遊歩道に沿って標高差400メートルの山の斜面を駆け上がります。

また、白鳥の飛来を多くの方々に知っていただくため、飛来確認後12月上旬から2月下旬、中腹に白鳥の姿をイルミネーションで浮き上がらせています。

○ 姉妹・友好都市

「武蔵野市」（東京都）

武蔵野市との交流は、旧豊科町において当時の武蔵野市関係者が豊科町出身という縁で始まり、昭和62年11月３日に姉妹都市盟約を結びました。

平成19年２月５日には安曇野市として友好都市提携を結び直し、武蔵野桜まつり、青空市、市民交流ツアーやスポーツ交流など民間レベルでも幅広い交流が行なわれています。

「江戸川区」（東京都）

江戸川区との交流は、旧穂高町が旧有明小学校跡地を江戸川区へ譲渡したことが縁で始まり、昭和49年２月15日に友好都市盟約を結びました。

平成19年８月４日、安曇野市として友好都市提携を結び直し、区民まつりへの参加やスポーツ交流、青少年交流等を通じて友好を深めています。

「福岡市東区」（福岡県）

福岡市東区との交流は、旧穂高町において平成元年、古代「阿曇族」をルーツとする縁で始まり、平成６年11月３日、穂高町合併40周年を記念して友好交流推進協定を結びました。

平成３年からは青少年の相互訪問事業を行なっており、安曇野市となってからも交流を継続しています。

「三郷市」（埼玉県）

埼玉県三郷市との交流は、旧三郷村において「三郷」という同じ自治体名が縁で始まり、友好都市提携を結びました。

平成18年７月１日、安曇野市として友好都市提携を結び直し、住民ふれあい事業やスポーツ等を通じて市民交流を行なっています。

「三郷町」（奈良県）

三郷町との交流は、旧三郷村において「三郷」という同じ自治体名が縁で始まり、各種交流事業を実施してきました。

平成18年７月１日、安曇野市として友好都市提携を結び直し、住民ふれあい事業やスポーツ等を通じて市民交流を行なっています。

2010年５月12日、安曇野市と三郷市・三郷町で構成される、三郷・安曇野友好都市交流推進協議会が当市において開催されました。

「真鶴町」（神奈川県）

真鶴町との交流は、旧堀金村において住民同士の交流が縁で始まり、平成７年９月 15 日堀金村合併 40 周年を記念して友好親善提携を結びました。

平成 18 年９月 30 日、安曇野市として友好都市提携を結び直し、青少年の相互訪問事業等を通じて市民交流を行なっています。

「クラムザッハ」（オーストリア共和国チロル州）

クラムザッハとの交流は、旧豊科町があづみ野ガラス工房を開設した頃、クラムザッハにヨーロッパで唯一の国立ガラス専門学校があることを紹介され、このガラス専門学校を視察したことが縁で始まりました。

その後、相互の訪問団が行き来する中、平成元年６月に双方の友好会で友好協定を結び、平成５年 11 月 25 日には自治体同士で姉妹都市提携を締結しました。

平成 19 年 11 月４日、安曇野市として姉妹都市提携を結び直し、相互訪問など民間レベルでも幅広い交流が行なわれています。

「五三街道」（中華人民共和国　遼 寧 省）

五三街道との交流は、旧三郷村において海外自治体と交流しようとの気運が高まったことから始まりました。

これに先立ち、三郷中学校と遼 寧 省 海 城 第二中学校が友好姉妹校提携を締結していたことから、遼寧省内の五三郷（ごさんごう・当時）を紹介され、「三郷」が縁で平成 10 年５月 28 日に友好村郷提携を結び、安曇野市となってからも交流を継続しています。

○人物

(1) 名誉市民

「青木 祥二郎」（あおき　しょうじろう）

明科中川手に生れ、本名は匡と言いました。1928 年（昭和 3）、小学校を卒業と同時に郷里を出て、後に 志 を立て、能楽の道に入りました。内弟子時代は、苦しく又厳しい修 業を積みました。1978 年（昭和 53）５月 28 日に、重 要無形文化財保持者（総合指定）の指定を受けました。明科で行われている薪能に出演し、地域の芸術文化の振興にも大きな功績を残しました。

「熊井 啓」（くまい　けい）

豊科吉野に生れ、幼少時代の6年余を過しました。1949年（昭和24）に信州大学文理学部に入学し、演劇部「山脈」で演出をしながら、多数の公演をしました。1964年（昭和39）、映画「帝銀事件・死刑囚」で監督デビューし、翌年には、映画「日本列島」が、日本映画協会新人賞を受賞しました。2001年（平成13）、松本サリン事件を題材にした衝撃作映画、「日本の黒い夏－冤罪－」を制作しました。

「髙橋 節郎」（たかはし　せつろう）

穂高狐島に生れました。1940年（昭和15）に東京美術学校（現東京芸術大学）研究科を修了し、主に日展・日本現代工芸美術展を舞台に作品を発表し、文部大臣賞等様々な賞を受け、審査員や理事としても活躍しました。また、「漆絵版画」と呼ばれる漆芸を考え出しました。1982年（昭和57）には、穂高町の名誉町民に推され、2003年（平成15）には、北穂高の生家の地に、安曇野髙橋節郎記念美術館が開館しました。

「田淵 行男」（たぶち　ゆきお）

鳥取県黒坂村に生れました。1924年（大正13）、東京高等師範学校（現筑波大学）博物科に入学し、ギフチョウの研究を行いました。1945年（昭和20）に穂高牧に疎開し、高山蝶の生態研究に入りました。翌年の1946年（昭和21）6月には常念岳乗越で、高山蝶タカネヒカゲの幼虫を発見し、以来、生態の研究に没頭して、その解明に成功しました。また、山麓のアシナガバチ・ギフチョウ・ヒメギフチョウの生態研究も始めました。1959年（昭和34）には、数百回に及ぶ北アルプスの踏査が実り、著書「高山蝶」を出版しました。

(2) 安曇野市ゆかりの著名人物

「荻原　碌山」（おぎわら　ろくざん）

穂高矢原に生れました。本名は荻原守衛といいました。1899年（明治32）に美術家を志して上京しました。1901年（明治34）、意を決してニューヨークへ渡米し、洋画の研究を行いました。その後、二度にわたって、フランスのパリのアカデミイ・ジュリアンに入学して、傑作「坑夫」等を制作しました。ロダンの「考える人」と出合ったり、西洋・エジプトの古代美術の研究もしたりしました。新宿角筈町にアトリエ「オブリビリオン」（忘却庵）を建てて住み、文展で「女」・「北条虎吉像」等多数の作品が入賞しました。

「多田 加（嘉）助」（ただ　かすけ）

三郷中萱に生れる。襲名して加（嘉）助と改め、庄屋役に就く。1684年(貞享1)2月、天和年間からの凶作が続き、年貢の軽減を藩に陳状しました。陳状を受けた藩の年寄役は、よろしく取り計らうことを約束しましたが、家老のたくらみにより、庄屋を免ぜられました。1686年（貞享3)、凶作と疫病が併発し、餓死者も発生したが、藩では却って収納を過酷にしました。加（嘉）助は、同志と協議して、五か条からなる請願書を作り、12名で奉行所に提出しました。この時、民衆4,000人と共に、松本城下に参集し、訴状を受け容れなければ江戸へ直訴の勢いも示しました。（貞享騒動：じょうきょうそうどう）家老の名義で願いが聞き入れられ、村へ引き上げましたが、藩に欺かれ、主謀者として捕らえられました。11月22日、主謀者加（嘉）助以下8人が磔刑（はりつけ）に、家族等20人は獄門の刑(打ち首)に処せられました。

「臥雲 辰致」（がうんたっち）

堀金小田多井に生れ、幼名は栄弥といいました。農家の副業の足袋底の作成の手伝いを機に、紡績機の発明に専念しました。1863年（文久3）に、安楽寺に入り7年間修業後、安楽寺の末寺臥雲山孤峰院の住職となりましたが、廃仏毀釈となり、還俗して臥雲辰致と名乗りました。1871年（明治4）に、外国綿業の進出に対抗するため、紡績機の発明が再燃しました。1873年（明治6）に、臥雲式紡織機（ガラ紡）を発明し、1877年（明治10）には、わが国初の内国勧業博覧会で最高の鳳紋賞牌を受けました。

「小林 喜作」（こばやし　きさく）

穂高牧に生れました。17歳で猟を始めたと言われています。猟のため北アルプス一帯を歩き回り、山道に精通しました。当時、中房谷を起点とした槍ヶ岳への縦走路は、4日も5日もかかっていました。そこで、喜作は、自分が猟でよく知っている、大天井から分岐して、赤岩岳・西岳を経て水俣乗越に下り、そこから東鎌尾根を登って、たった1日で楽に行ける、いわゆる「喜作新道」を開拓しました。息子の一男と二人で開拓したこの道は、「アルプス銀座」と呼ばれ、多くの登山者に親しまれています。

「ウォルター ウエストン」

イギリスのダービー近郊に生れました。1888年（明治21)、宣教師として熊本に着任しました。来日間もなく富士山や日本アルプスに興味を持つようになり、日本アルプスをヨーロッパに紹介しました。

1986年（昭和61）には、堀金須砂渡にウエストン像が建立され、2年後に、来日100周年を記念して、同地にウエストン記念館が開館しました。

「井口 喜源治」（いぐち　きげんじ）

穂高等々力町に生れました。1876 年（明治 9）、東穂高矢原の研成学校に入学し、同年輩の相馬愛蔵と親しく学びました。東穂高村高等小学校に勤務し、内村鑑三の影響による無教会キリスト教主義の人格主義教育によって、生徒を引っ張っていきました。また、相馬愛蔵・望月直弥等と共に東穂高禁酒会を組織し、キリスト教の伝導等を行いました。1898 年（明治 31）11 月には、相馬安兵衛・臼井喜代等の有力者の賛助を得て、研成義塾をたちあげました。

「松沢 求策」（まつざわ　きゅうさく）

経歴穂高等々力町に生れました。憲法の制定、議会の開設、地租の軽減、不平等条約改正の阻止、言論の自由や集会の自由の保障などの要求を掲げた自由民権運動を展開しました。

「臼井吉見」（うすい　よしみ）

堀金田尻に生れました。東京大学国文科を卒業後、県内外の教職を歴任し、親友古田晁の興した筑摩書房の経営を助けました。1946 年（昭和 21）、筑摩書房「展望」の初代編集長に就任し、多くの作家や評論家を世に出す一方、自らも近代文学を中心に、個性的な文芸評論を発表しました。1973 年（昭和 48）に、10 年の歳月をかけて完成した「安曇野」全 5 巻により、第 10 回谷崎潤一郎賞を受け、「安曇野」の名を全国的に浸透させました。

○交通

(1) 塩の道

「塩の道」とは、海でとれた塩を運ぶ道のことです。人間の暮らしには塩が欠かせないのですが、海のない長野県には日本海や太平洋から塩が運ばれてきました。安曇野には、新潟県の糸魚川という所から塩が運ばれてきました。

塩の道は、昔の人の暮らしを支える大切な道だったのです。

(2) 川の道

昔は今の松本市と長野市の間には山々が連なり、行ったり来たりするには大変でした。まして、たくさんの荷物を運ぶのには広い道もないので大変な苦労でした。そこで目をつけたのが犀川を使って舟で荷物を運ぶことでした。船だと一度に大量の荷物を運ぶことができるのです。

松本と信州新町の間は船で、信州新町と長野の間は馬などによって荷物を運んだということです。安曇野市にも明科地域の木戸には船着場があり、宿泊のための宿屋もありました。

（「わたしたちの安曇野」より）

○ 堰

⑴ 拾ヶ堰（じっかせぎ）

松本市下平瀬で奈良井川から揚水して、穂高の烏川に合流するまでの距離は 15 キロ。北アルプスの雄姿に向かってほぼ 570 メートルの同一等高線上を流れています。拾ヶ堰は、近世を通じて安曇野で開削された矢原堰、新田堰、勘左衛門堰等一連の「横堰」の集大成をなす堰です。
この堰は吉野村、成相町村、新田町村、上堀金村、下堀金村、矢原村、柏原村、保高村、保高町村、等々力町村の 10 ヶ村をうるおしたことから「拾ヶ堰」と名付けられました。

⑵ 五ヶ用水（ごかようすい）

江戸時代の 1832 年、庄屋の牛越茂左衛門らが中心となり、池田村の村々にも協力を求め開削した用水路。明科地域押野地区の内川から取水し、小泉地区で犀川に合流。幹線の総延長は、約 12 キロメートル、灌漑面積は約 100 ヘクタール。押野、塩川原、荻原、中村、小泉の 5 地区の水田を潤しています。

○ 民俗・信仰

⑴ 福俵曳き（ふくだわらひき）

福俵曳きは豊科の成相、新田両地区に江戸時代から伝わる道祖神の行事です。1 月 7 日に建てる道祖神御柱に付けられる「だし」と称する巨大な福俵を、1 月 15 日（年によってはその前後）の御柱倒しのあと、外して町内を曳きまわします。途中人間ピラミッドなどの演技があり、最後に前年祝い事のあった家へ持ち込まれます。飴市の 2 日目に行われるので、その呼び物ともなっています。

⑵ 道祖神（どうそじん）

本来は、村の境界におかれて外部から侵入する邪霊、悪鬼、疫神などをさえぎったり、はね返そうとする民俗神でした。陰陽石や丸石などの自然石をまつったものから、男女二神の結び合う姿を掘り込んだ双体道祖神まで、その表現方法は多様です。双体道祖神は長野のほか、群馬や山梨にも分布しています。

⑶ 馬頭観音像（ばとうかんのんぞう）

物資の国内流通が盛んになると、馬が移動や荷運びの手段として用いられることが多くなりました。これに伴い馬が急死した路端等に供養のために建てられている場合が多く、動物供養塔としての意味合いが強く残っています。

⑷ 庚申塔（こうしんとう）

庚申講（庚申待ち）とは、人間の体内にいるという三虫という虫が、寝ている間に天帝（道教における最高神）にその人間の悪事を報告しに行くのを防ぐため、庚申の日に夜通し眠らないで、天帝や

猿田彦や青面金剛を祀って宴会などをする風習です。庚申塔は庚申講を3年18回続けた記念に建立されることが多いといわれています。

(5) 二十三夜塔（にじゅうさんやとう）

18世紀の後半から昭和の初期にかけて、日本の各地で「講」（同一の信仰をもつ人々の集まり）を組織した人々が集まって、月を信仰の対象として精進・勤行し、飲食を共にしながら月の出を待つという、月待ちの行事が行われました。その際供養のしるしとして建てた石碑（月待塔）のひとつが、二十三夜塔といわれています。

○ 特産物

(1) りんご

北アルプス山麓にある扇状地は、広大なりんご畑が広がっており、安曇野の気候風土など自然条件も整って、安曇野市のりんごは最高級の品質を誇ります。5月にはりんごの白い花が一面に咲きます。
主な種類は9月初旬の『つがる』から始まり、『シナノスイート』・『シナノゴールド』・『秋映』、11月の『ふじ』となります。りんごの中に蜜がたっぷり含まれたさわやかな甘さが特徴です。旧三郷村時代には、りんごを前面に押し出したイベントとして「三郷アップルマラソンIN安曇野」も開催されていました。

(2) 天蚕（てんさん）

桑の葉を与え、室内で飼うカイコを家蚕と呼ぶのに対して、屋外で飼育する絹糸昆虫を野蚕と呼びます。天蚕はその野蚕の仲間です。
天蚕の繭から採れる天蚕糸は、淡緑色で、独特の光沢と優美な風合いを持ち、その希少性から「繊維のダイヤモンド」とも呼ばれており、その天蚕を織り込んだ紬は有明紬と呼ばれています。

(3) 凍り餅（こおりもち）

冬場の最も寒い時期に作って、春暖かくなってから食べる保存食です。
お餅を長方形に切り分け、一つ一つ紙で包み、水に4日間位浸します。なるべく寒い夜に水から上げ、春まで軒下に吊るして完成となります。
一年で最も寒くなる大寒の前後10日間が凍り餅作りの勝負です。食べ方は、お湯に浸して柔らかくしたり、そのままかじったり・・・春の農作業の合間にいただく「ふるさとの味」です。

(4) 幻の黒豆「信濃黒」（しなのぐろ）

信濃黒は３０年ほど前に当時の長野県中信農業試験場で開発されたオリジナルの黒豆です。しかし、まとまった生産量がないまま、まさに幻の黒豆となっていました。
安曇野の黒豆は丹波黒と比べると若干小粒ですが、その栄養価は高く「アントシアニン」は同等以上と

いわれています。
　この豆は、味噌(みそ)や醤油(しょうゆ)、さらには和菓子(わがし)や洋菓子(ようがし)にも使われています。

○ 民話(みんわ)

(1) 重柳(しげやなぎ)のきつね

　むかし、南穂高の重柳(しげやなぎ)に、働き者の喜作(きさく)という百姓(ひゃくしょう)がすんでいました。ある年の五月、田植えを一人でやっていると、「もし、もし、おらにも田植えを、手伝わせてくんねえか。」
　と、いう声がします。
（はて、だれずらいな）
　と、田植えの手をやすめてみますと、若くて美しい女の人が、田んぼのあぜに立っていました。
「いま、声をかけたのは、おまえさんかね。おまえさんのような美しい人が、こんなどろの中へ、へえって仕事をすると、それこそ、まっ黒になってとりかえしがつかなくなるじ。」と、いいますと、
「そんなこと、かまわねえわい、おらは、田んぼの仕事がだいすきで。」
と、いうなり、むすめは、きもののすそをあげて、田んぼへ入り、とてもしろうととは思えないくらい、じょうずに、植えはじめました。
　喜作は、きょう中には、とても終わらないと思っていたのに、みるまにすんでしまったので、とても喜んで、「手つだってもらったおかげで、きょうの仕事は終わったわい。どうだね、なんにもねえが、おらの家へいって、夕めしでもくっておくれや。」と、むすめを家へつれてかえりました。
　喜作が、田植えのどうぐを、かたづけ、さて、夕めしの用いをしようと家にはいったとたん、びっくりしてしまいました。
　今まで、ちらかっていた家の中は、きれいにかたづけられ、いろりには、赤々と火がもえています。
（むすめは、どこへ行ったずら）、と、思ってさがしてみますと、井戸ばたで、喜作の汚れたきものの、せんたくをしていました。
（なんと、手の早い、働き者のむすめだろう）
　喜作は、すっかり感心してしまいました。
　やがて、夕はんになり、二人は、おかゆをたべながら、せけん話をしたのですが、そのうち、むすめは、はずかしそうにいいました。
「おら、とらの、というものだか、道にまよってここまできちまったわい。親もきょうだいもいねえ一人もんだで、もしかして、おらが気に入ったらこの家へおいてくれねえかい。」
　喜作は、このむすめが気に入っていましたので、
「おらも、みてのとおり、ひとりものだわい。おらほうこそ、おまえさんにいてむらったら、どんなにたすかることか・・・ぜひ、この家にいておくれやめ」　と、いいました。
　それから、二人は、なかよく働き、なん年かすぎました。
　やがて、じょうぶな男の子が生まれ、親子三人はまえよりもしあわせにくらしました。

ある日のこと、喜作が田んぼの仕事をおえて家へかえってきますと、とらのは、あかんぼうにおちちをくれていました。が、きもののすそから、キツネのしっぽが出ているのを見て、喜作はたいへんおどろきました。

「おまえ、そのしっぽは、どうしただや。」

「えっ、しっぽが・・・・」

と、いったまま、とらのは、まっさおになりました。

「おまえさん、きょうまでだましていて、わりかったいね。おら、じつは、このあたりに住むキツネだわい。一度でいい、人間のくらしがしてえと思い、おまえさんところへきたが、へえ、おらの、ほんとうのすがたをみられちまったで、ここで、くらすわけにもいかねえわね。どうか、この子を、しっかり育てておくれや。」

と、いったかと思うと、けむりのようにきえてしまいました。

それからというもの喜作は、この赤んぼうを、とても苦労してそだてました。が、この子は大きくなるにしたがい、用水路をほるなどのしごとを、いくつもしたと、いいつたえられています。

（信濃教育会出版　平林治康著より）

⑵ 八面大王

桓武天皇の昔、有明山に魏石鬼八面大王と名のる鬼が住んでいた。大王はどこへでも飛んでいって人々をさらい、財産を盗み取っていた。

さて、有明は古厩村の矢村に、幼い頃に父親を八面大王にさらわれた弥助という男が、母親と二人で暮らしていた。ある年の暮れ、弥助が正月の買い物をしに、山を下っていくと、近くの林で激しい鳥の羽音が聞こえた。見ると、一人の男がわなにかかった山鳥を今にも絞め殺そうとするところである。弥助は、男に正月用の金を渡し、山鳥を離してやった。そんなわけで、年取りは貧しいものとなったがその夜、誰やら戸口をたたく音がする。開けると一人の娘が立っていた。

「私は池田へまいりたいと来た者ですが、道に迷って困っています。どうか一晩泊めていただけないでしょうか。」

二人は娘を家に入れ、にぎやかな年取りを過ごした。吹雪が続き、娘は弥助の家に滞在を続けたが、やがて春を待たずに二人は結ばれた。

雪解けを待っていたかのように再び八面大王が暴れだした。この噂は都にも伝わり、将軍の坂上田村麻呂が奥州の蝦夷を征伐する途中で八面大王を征伐することとなった。田村麻呂は八面大王に攻めかかったが、抵抗にあい多くの軍勢を失う結果となった。手こずった田村麻呂は近くの満願寺に願をかけた。すると観音様が現れ、「甲子の年、子の日、子の刻に生まれた男子に、三十三ふしある山鳥の尾を使い矢を作らせ、それで射たら大王を倒せる」とのことだった。将軍は村々に布令を出し、その男子を探したところ、それは古厩村に住む弥助に違いないとのことであった。弥助は父親の敵を討てる機会と引き受けたが、三十三ふしもある山鳥など見たことも聞いたこともない。すると女房が

「私にお任せください。実家に行けばあるかもしれません。」

と言う。弥助は喜んで女房を実家にやると、次の朝確かに三十三ふしある山鳥の尾を持って帰ってきた。弥助はそれで矢を作り将軍に献上すると、将軍はいたく喜んで弥助にたくさんのほうびを与えた。しかし、喜んで家に帰ると女房が

「私は前に助けていただいた山鳥です。あの山鳥の尾は私ども一族の魂がこもったものです。これでご恩返しができました。山へ帰らせていただきます。」

と言い出すと、山へ飛び立っていってしまった。

その後、将軍は弥助の矢を使って八面大王を亡ぼした。弥助親子は来る日も来る日も山鳥が帰ってくる日を待ち暮らしたという。

また、田村麻呂は二度と八面大王が甦らないように、身体をばらばらにし各地に埋めた。頭を現在の松本市筑摩神社の首塚、耳を穂高有明の耳塚、足を同じく穂高有明の立足、そして胴体を北穂高の狐島と大王わさび農場がある御法田に埋めたと言われている。

(3) 室山のデーラボッチャ

大昔、日本ができたとき「デーラボッチャ」という巨人がいて、高い山をけずって谷をうめたり、土地の高い所と低い所をならして平地にしたりする仕事をしていた。このデーラボッチャが残した足跡とか、土を運搬したとき、もっこからこぼれた土で山ができたとか、使った藤づる、火打石などたくさんの伝説が残されているが、室山もデーラボッチャが運んだ土でできた山だといわれている。

昔、デーラボッチャが、東山の方が西山より低いので、東山の神様に頼まれて、西山の神様が目を覚まさないうちに、西山の土をもっこに入れて東山へ運んだ。しかし、もう一もっこというところで鶏に鳴かれて夜が開けた。あわてたデーラボッチャは、その一もっこを落としてしまった。その土でできたのが室山と言われている。

(4) 常念坊物語（じょうねんぼうものがたり）

ある日のこと、有明山の方から真っ白な火の玉が飛んできて乗鞍岳の中腹に消えた。「ありゃ一八面大王の一の子分の常念坊という鬼が飛行の術でまゆみ岳へ飛んできたらしいぞ」誰もがそう心配しました。やがて年の暮れになり、村の市は大勢の人々で賑わいをみせていました。日が暮れて酒屋も店じまいの準備をしておりますと

「酒、五升おくれ」

見ると髪の毛を背中までたらし、ぼろぼろの衣を着て、杖を突いた年寄りの坊さんが五合徳利を差し出して立っています。酒屋の主人は

「ご冗談をおっしゃっちゃ困ります。五升なんて入りません」

と言うと、その坊さんは

「文句を言わずに五升入れてくれ」
と怒鳴りました。主人は仕方なく酒を注ぎ始めましたが、不思議なことに五升の酒がこの徳利にすっかり入ってしまいました。
「どうだ、わしの言ったとおりだろうが」
そう言って坊さんはカラカラ笑うと闇の中に消えていきました。

このように、村の市がたつと決まって坊さんが現れて酒を買って行くので、山の化け物か鬼だろうと人々は噂しあいました。ある年の暮れのこと、どうにもがまんできなくなった酒屋の二人の若い衆が、山へ向かう坊さんの後ろをつけてみました。年寄りとも思えないすごい速さで歩いていく坊さんを見失うまいと若い衆は走り続けました。しかし、まゆみ沢へ入っていった。坊さんの姿は岩山の中へ吸い込まれるように消えていきました。若い衆は坊さんの消えた辺りを見つめていましたが、気を取り直して帰ってきました。酒屋の若い衆からこの話を聞いた村人たちは、
「八面大王が討たれた時に、まゆみ岳に飛んで来た常念坊に違いねえ」
と口々に噂しました。また恐れて、日暮れ時には子どもにまで、
「常念坊が出てくるで、早く家に入れよ」
と言っていました。しかし、常念坊の身なりの恐ろしさは人々の心に残りましたが、その他には何も悪いことはしませんでした。しばらくして、村人たちは常念坊の住みついているまゆみ岳のことを常念岳と呼ぶようになりました。こうして村人の呼び方が変わってからは、暮れの市には常念坊は姿を見せなくなりました。しかし、常念岳のその勇壮な姿とともに常念坊の姿も雪形として村人の心の中に今も生き続けています。

（平林治康『常念坊物語』より）

⑸ 泉小太郎（いずみこたろう）

大昔、松本平は一面の湖だった。この湖に住んでいた白龍と犀龍は、その子を八峯瀬山（鉢伏山）に生んだ。その子は日光泉小太郎と名づけられ、牛伏寺中山のあたり、また城山の放光寺あたりにも住み育ったと言われている。

その後、母の犀龍は、自分が龍であることを小太郎に見せることができず、湖底にいたが、小太郎はついに尾入沢（島内平瀬と田沢の境）で、母犀龍に会うことができた。

そこで、母犀龍は小太郎に言った。
「私は諏訪大明神が身を変えたものです。お前は、この私の背に乗り、この湖の壁を破り、ここを人の住める里にしなさい」
小太郎は、母に言われるまま尾入沢（犀乗沢）から犀龍に乗り、山清寺（山清路）や水内の岸壁を突き破り、千曲川の川筋から越後の大海まで湖の水を流し、この地に平らをつくった。